

能登半島地震「災害ボランティア」体験記

松尾 和光 (まつお かずみつ/静岡市在住)

「泥を見ないで、人を見よ」

これは災害ボランティアの現場で語られる心得だ。

自然災害が起きた被災地に行くと、まずはその物理的な惨状に目が奪われてしまう。泥出しやがれきの撤去などは、被災地の復旧・復興を進めていく上で重要な作業である。

しかし、災害ボランティアの活動では、「どれだけ作業をこなせたか」よりも「どれだけ被災者の気持ちに寄り添えたか」が大切なのだ。

今年のゴールデンウィークに、僕は友人のYちゃんと一緒に能登半島地震の被災地にボランティアに行ってきた。行政から委託を受けたNGOのスタッフとして福祉避難所や仮設住宅で暮らす被災者の方々を訪問し、生活上の困りごとを聞き出すことが、今回のミッションだ。

僕はこれまでも何度か災害ボランティアを経験してきたのだが、仮設住宅での聞き取り活動は初めてだった。

「しっかりと寄り添えるだろうか？」と戸惑っている僕の不安をよそに、Yちゃんはいとも簡単に住民たちと打ち解け、上手に傾聴する。そして困りごとの聞き出しに収まることなく、その場ですぐで

きるお手伝いをしたり、ややこしい悩み事には親身になって解決の方法を伝えていた。

彼とは10年以上の付き合いになるが、彼の優しさと行動力を見て改めて尊敬した。

現地スタッフや他のボランティアの皆さんも、本当に気持ちの良い人たちばかりだ。僕がボランティア活動に参加する理由の一つは、こうした“善き人たち”に出会えることだ。

被災者の気持ちに寄り添う

ある日の午前、福祉避難所で暮らすおばあちゃんたちを「とも旗祭り」という地元のお祭りに連れて行った。これはおばあちゃんたちからのリクエストである。避難所で長期間暮らしていると、体も動かさなくなるし気分も塞いでくる。避難所で暮らす方たちの外出を支援することも、大切な活動だ。

とも旗祭りは、石川県の無形民俗文化財にも指定されている伝統行事だ。近年はコロナ禍のために開催されず、今年やっと久しぶりに再開されたのだが、震災の影響もあって規模を縮小して開催された。会場の小木港には立派なのぼり旗が1本掲げられ、地

元の子供たちから大人まで、いろんな方たちが楽しそうにはしゃいでいた。

僕たちのグループとは別に、福祉施設に入所していた方々もお祭りを見に来た。そして、こちらのおばあちゃんたちと久しぶりの再会を喜んでいた。手を取り合って涙を流している人もいた。

避難所に戻るとき、おばあちゃんたちは笑顔で「ああ、来てよかった！」と言ってくれた。その言葉を聞く僕たちもまた嬉しくなる。わずかな時間ではあったが、僕たちは確かに「被災者の気持ちに寄り添う」ことができたと思う。

マスコミの報道も減り、人々の関心も薄くなっていくが、被災地はまだ多くの支援を必要としている。だから僕は、また近いうちに能登半島に行くつもりだ。



大きなのぼり旗に「復興誓能登」の文字が躍る（2024年5月3日、能登町的小木港にて撮影）